
虹色の恋

雑助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色の恋

【Nコード】

N2618L

【作者名】

薙助

【あらすじ】

大学二年の夏、俺達はある約束した。

この物語は、俺と俺の大切な仲間たちとの思い出の物語。それぞれの想いが重なり合った時、一筋の虹が想いを繋ぐ架け橋となる。

更新は不定期ですので、その辺はご了承ください。

無色了物語の序章了（前書き）

はじめまして、小説初心者の雑助といたします。

文面や物語に読みづらいたところがあるかもしれませんが、一生懸命書いていきたいと思うので、どうぞよろしく願います。

また、更新は都合により不定期ですがなるべく間隔はあけないつもりなので、粘り強く読んでいただけたら本望です。

無色〱物語の序章〱

それは、小学6年の夏。

出会いと初恋、そして別れ・・・。

その全てが俺にとって忘れることのできない思い出。

「君、何年生？」

俺が初恋の女の子と出会ったのは、自宅から歩いて10分程度のところにある開けた原っぱ。

初めて見た時の彼女は地元の中学の制服を着ていて、夏服独特のシヤツが風に吹かれてふわふわとなびくのが凄く綺麗だった。

サラサラとした長い髪の毛。

スラっとしていて、背の高い容姿。

ほのかに香る甘い匂い。

俺にとって、そのどれもが今まで感じたことのない胸のざわめきを生むには十分だった。

「ねえ、聞こえてる？」

俺の顔を覗き込む彼女の顔には、まだ少し幼さが残っていて、彼女が年上だという事を全く感じさせなかった。

でも、近くで見る彼女の顔は小学6年だった当時の俺には直視できず、目線をずらすのが精一杯でとても気軽に話ができる状況ではなかった。

だけど、さすがに無視するわけにはいかず、小さく頷くことしかで

きなかった。

「そっか、シャイなんだね。」

俺の隣に静かに座った彼女の顔には、無邪気という言葉が似合うくらい幼さが残る笑顔でいっぱいだった。

それから彼女は俺に沢山の話聞かせてくれた。

自分の話や家族のこと。友達の話など、日が沈むまでの1時間くらいの間ずっと。

彼女が話をしている間、俺はほとんど黙ったままだったが、それでも彼女は笑顔で俺に話しかけてくれていた。

俺は不思議だった。

初めて会った年下のガキに、何の理由も接点もないのに話しかけてくれたのか。

でも、その答えはそれから先ずっと知ることはなかった。

その日から彼女は、時々原っぱに現れては、その日あったことや最近興味のある事の話などを俺にするようになった。

最初こそ、あまり話せなかったが、回数を重ねるにつれて次第に俺からも話せるようになっていった。

当時の俺は友達も少なく、決まった友達と話さなかったせいも楽しみといえることがほとんどなかった。

でも、学校が終わった後に原っぱで会える年上の女の子と話す事が、次第に俺の唯一の放課後の楽しみになっていた。

しかし、そんな日々はあっという間に過ぎていき、夏も終わりに差

し掛かった頃。
突然それは終わりを告げた。
彼女の転校という形によって…。

そして、あれから8年。

俺は大学生になり、地元を離れアパートで一人暮らしをしながら大学に通う毎日を送っている。

あの子と過ごした、あの原っぱにはもう何年も行っていない。

でも、最近たまにあの頃の夢を見る。

夢の中の彼女はさみしそうな顔で空を見上げているばかりで、俺の覚えている吸い込まれそうな無邪気な笑顔は微塵もなかった。そして、俺に向かって何かを言おうとするところでいつも目が覚める。

2008年春。

もうすぐ、初恋の女の子に片思いしてから8度目の夏がやってくる。

無色〱物語の序章〱（後書き）

この物語は、章ごとに虹の色に沿って展開していくつもりです。
今回はプロローグ的なものなので、無色とさせていただきました。
その辺も徐々に理解していただけると幸いです。

第一色く紫陽花・そして始まりく（前書き）

ここからが本当の話の始まりです。

最初のうちは説明臭さが抜けませんがご了承ください承を。

第一色〜紫陽花・そして始まり〜

ピピピピピピピピピピピピ

「ん・・・」

俺は半ば聞き飽きた騒音のするものに、一瞬にして夢の世界から引き戻された。

騒音の主である目覚まし時計を優しくなだめ、タップリと睡眠を摂って快調の体をゆっくりと起こし背伸びをする。

カーテンを開け外を見ると、久しぶりの快晴な青空がゆっくりと俺を現実の世界へと連れ戻してくれる。

「ふう。今日も一日頑張ってみますか。」

もう一度大きく背伸びをし、首をコキコキと鳴らすとベッドから立ち上がり朝の支度に取り掛かる。

今日は2008年6月2日金曜日。

梅雨時まつさかりの毎日に嫌気がさし始めた頃の束の間の晴れの日。といっても特に特別なことがあるわけでもなく、ただの平日には変わりないんだけど。

その日は何故かいつもとは違う清々しさを感じていた。

ふと時計をみると、針は間もなく7時を指そうとしていた。

「ヤバツ！！もうこんな時間だよ。」

時間を確認した俺は、急いで出掛ける支度を済ませて玄関へと急ぐ。

「忘れ物はないよな？」

前日から玄関先に用意しておいたバッグやケースを前に入念に荷物
のチェックを済ませると、重そうな荷物を抱え部屋を出る。

しっかりと鍵を掛けてバタバタと部屋をあとにする俺の後ろ姿は、
まるで登山か何かに行くかのように
見えたに違いない。

アパートから、徒歩で10分のバス停。

普段は通勤ラッシュで混雑する時間帯だからと全力で走ったのにも
関わらず、人気は少なく俺の他に2人いるだけだった。

息を整えながら一息吐こうとした時、ちょうどバスが到着したので、
俺は息の吐く暇もなくバスへと乗り込んだ。

席に着くと俺はようやく一息吐いて息を整えた。

「間に合った。」

予定通りのバスに乗れたことにほっと胸をなでおろし、見慣れた風
景が流れていくのをただ眺めていた。

バスに揺られること30分。

俺はバス独特の揺れに耐えきれず、ウトウトと浅い眠りに落ちてい
た。

「次は白浜ぐ、白浜でございます。お降りの方は・・・」

白浜という地名にハッと目を覚ます。

慌てて窓の外を見渡すと、見覚えのある景色が広がっていた。

「あ・・・、降ります!!降ります!!」

少しボーっとした頭をフル回転させ、重い荷物を背負うと急いでバスを降りた。

バス停を後にするバスを見届けながら、重い荷物を下ろすとスーッと深呼吸をする。

目の前に広がる景色に一気に目が覚める。

白浜。

そこは、そこら辺では有名な夕陽が奇麗に見える海岸。

そして、今回の俺の目的地。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2618/>

虹色の恋

2010年10月28日04時06分発行